

Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.88

試 行 錯 誤



特集 GREEN FOR AFRICA

(アフリカに緑を)

私たちにとっての GREEN FOR AFRICA

83年7月、JVCはソマリアにいるオガデン（エチオピア）からの難民たちとともに、農場建設に着手した。難民のなかから農業に関心のある者を選び出し、農地を与えた。私たちはいくたびかの困難に直面した。難民同士のグループのいざこざ、手厚いサービスによる難民たちの依存心。また用水路建設に大切な表土を使ってしまったこともあった。

何人もの人が農場建設に携わり、去っていった。年月が経ち農場は少しずつ緑が豊かになっていった。私たちもイスラム教徒や遊牧民とつきあう術を覚えたのかもしれない。以前よりも問題を起こすことが少なくなった。

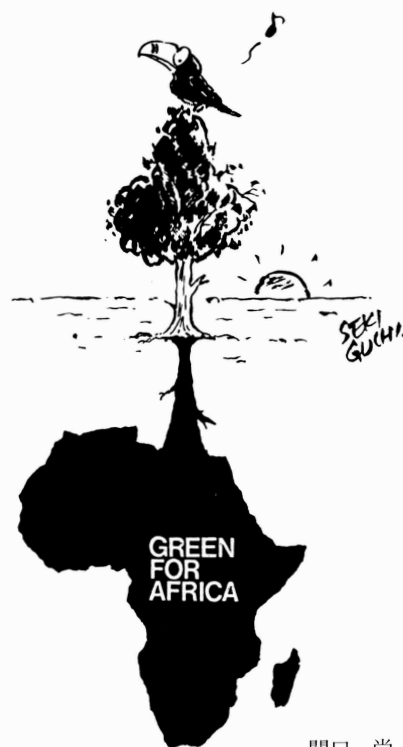
ソマリアの自然はあまりに過酷なため、JVCソマリアチームを“風の学校”の校長である中田正一さんは「地獄の突撃隊」といったことがある。今もソマリアの自然の厳しさには変わりはないが、中田さんは「上空から見ると、農場は砂の海に浮かぶ緑の島のようにだ」と言うようになった。

しかし、難民キャンプの植林はなかなかはかどっていない。移動生活を基本とする遊牧民に植林の意味を伝えるのは難しい。少しばかり木を植えても、その何倍ものスピードで木々は切られていく。

エチオピアの場合はさらに厳しい。干ばつは同時に飢餓を意味する。わずかな農地で作られる作物の量は知れているのに、政府の買い上げ価格は低く抑えられたままだ。農民たちは自衛のため税金のかからないヤギやヒツジを飼い、それがまた農地の荒廃をもたらす。

エチオピアの歴史は古い。エジプト文明の繁栄もエチオピアの土壌が、遠くナイル川によって運ばれて生まれたものだという。なかにはエチオピアの荒廃は手のほどこしようがなく、食糧を援助し続けるか、住民の移住しかないという人もいる。

地球も生きものだから年を取り、周期的な気候の変動は避けられないのかもしれない。しかしどんな時であろうと人々は生きていかなければならない。私たちの目標はマーシャ村の土壌をこれ以上疲弊させないこと。なんとか人々が飢えることなく暮らせること。または難民による砂漠化を最少限にくい止めること。とりあえず、それしかない。



関口 尚

目 次

何が地球環境問題なのか	3	砂漠化とたたかう NGO	15
マーシャ村の植林と農業	5	エチオピア 干ばつと飢餓の歴史	18
日記から — 交渉は9回転んで10起きる	9	今年も、東京グリーンウォーク	20
ソマリアの植林プロジェクト	10	南アフリカの黒人抗争	22
難民キャンプによる環境破壊	12	研修生6人、がんばっています	23

何が地球環境問題なのか

環境保全と人々の生活

エチオピア事業担当 林 達雄

地球の温暖化、酸性雨、フロンガスによるオゾン層の破壊、熱帯雨林の破壊、昨年から今年にかけて地球環境にかかわる記事が、新聞や雑誌の紙面をにぎわしている。竹下首相をはじめ、ブッシュ、サッチャー、ゴルバチョフ等世界のリーダーたちがこぞって、地球環境問題を重要課題として取りあげ、**環境元年**、**ガイヤ=生きる地球**などと言い出している。

人をバカにしていると思いませんか？

虫が良すぎると思いませんか？

今までは何か起こっても他人ごととして捉え、全く関心を示さず、問題がクローズアップされると臭い物にはフタをする式にあくまで局地的に扱ってきた。問題が地球上の他地域（特に第三世界）に悪影響をおよぼしても見て見ぬふりを続けてきたくせに、ようやく自分の尻にも火がついたことに気がつくとしてつけたように地球という冠をベタベタとはりつけ、大問題なのだぞと急にさわぎ始める。あくまで、都市（=先進国）の目から見た環境問題のとらえ方なのである。そこでは、具体的に生活する人々の姿は見えてこない。その解決方法として、人々の生活様式・ライフスタイルの変革にまでいたらぬわけである。

都市・先進国型の環境保全

もう20年近く前の話になるが、公害問題が大きくあつかわれた。水俣病、イタイイタイ病や工業廃棄物・洗剤・農薬等による河川や海水の汚染、光化学スモッグに代表される大気汚染の問題である。その後、補償問題が今だに続いているとはいっても、東京湾や加茂川の水は澄み始め、光化学スモッグで倒れる子供のニュースは聞かなくなった。重金属や排気ガス等の「規制」が対策であった。工業化による近代化の姿勢を変えぬまま、より高度な技術革新によって問題をのり越えてきたかに見える。だがそれは、あくまで局所的な処置で、特定物質に対する特定

な地域（日本国内）における解決にすぎなかった。公害の源である工場や製品が第三世界に移転・輸出された際の影響、原料の生産や採掘・伐採における問題はほぼ無視されてきたと言ってよいだろう。問題が他人の所で起ころうとおかまいなく、自分たちのまわりから見えなくなればよかったのである。

また、自分たちの見近な環境問題においても、見えがよく清潔そうに見えればよいわけで、たとえば、汚染した水を薬（=毒？）で処理して、中の生き物を殺して飲んでいる。疲れをいやしてくれる緑が欲しいといって、肥料と農薬を山ほど使って公園に木を植えている。ビルの中の気温や湿度を調整し、外界と隔絶した快適な局所的な環境を作り出している。一部の人間による、一時しのぎ的、エネルギー消費的な解決策。自分を含めて地球上に住む人々の生活と自然との間の新たな接点を求めようという根本的取り組みとはいいいがたい。

チェルノブイリは世界を結ぶか？

チェルノブイリの問題は、放射能汚染による被害の世界的共有という形で、宇宙船地球号の乗員としての共同運命体意識を高めるかに見えた。フロンガスによるオゾン層の破壊、二酸化炭素による温暖化現象またしかりである。

だがどうだろう。都市=先進国型の局地的、一時的対策で対処しようとするなら、共存どころか格差の拡大、すなわち、現在すでに始まっているシェルター化のひき金になる危険が充分あるとみる。放射能や紫外線や水位や気温の上昇からも安全で快適なシェルターの中に住み得る人々と、その外側にとり残された人々という形で。

マーシャ村から学びつつあること

JVC では1985年の飢饉に際し、緊急医療活動という形でエチオピア北部に住む人々に接した後、彼

らのかかえる「飢え」の問題に総合的に対処しようとしてきた。土壌侵食や雨水の流出に対する簡単な土木の施工や植林、農業のやり方の見直し、農民や婦人、子供たちの意識向上のための教育活動等「食べてゆく」条件を作るための環境たて直しのプロジェクトである。過去3年間にこのプロジェクトを通して私たちが学んできたことを以下に記す。

(1) 女性と環境 — 日々の生活の中で問題を切実に感じている人々が主体

当初20人の母親を対象にして始まった簡単な保健指導、野菜作り、料理教室が2年間のうちに大きく発展した。内容的には水（天水の利用）や植林（木の植え方・育て方）と環境の分野にまでおよび、対象者は1000人以上、JVCのスタッフから指導を受けた母親自身が各集落の民家を借りて他の女性たちに指導するようになった。

一見男の仕事のように見える植林にも、女性が男性以上に関心を示す。これは奇異に見えて実は当然のことなのかもしれない。エチオピアでは、水運び、燃量（牛糞・薪）運び、畑の世話はほとんど女性の手によって行われている。男は牛を使っての耕起以外は村の政治を行っている。すなわち、水、土壌、森等の環境要素に日々の生活の中で直面しているのは女性たちなのである。干ばつによって近くの水場が涸れたとき、遠くの水場まで重いカメを背負って水を汲みに行くのは子供からばあさんにいたるまで女性たちの仕事なのである。生活の中で環境破壊の問題と直面している人々が、その保全（対策）の牽引車となるようだ。

(2) 専門家とは？

マーシャ村でのプロジェクトはエチオピア政府との契約の下に活動を行っているが、この契約更新に際し政府が送ってきた評価チームは、JVCのエチオピア人スタッフには専門家がいないと酷評した。だが私たちはマーシャ村で働くスタッフたちに誇りに思っている。

たとえば元コックのエシャトーは、教育活動の総合責任者となっている。彼は学歴こそないが、対象となる女性たちや村人たちのかかえる問題を適格にとらえ、その解決方法をわかりやすい言葉や寸劇の形で伝えてゆく。教科書的な価値を押しつけるのが専門家だとするなら、それは人々の生活にとってマイナスにすらなり得る。第一人々のかかえる環境問

題に具体的解決方法を示してくれる専門家など皆無に近いのではないだろうか。

(3) ライフスタイルの変革

エチオピア北部の森林喪失や土壌の疲弊の原因の1つとして家畜の増加があげられる。牛が耕作に必須な他、ヒツジ等の家畜は税金の対象にならない財産で、人々は家畜と同居し大切にしている。ところが家畜は若木を食うので、植林の天敵でもある。逆に完全に裸地と化したハゲ山も数年間家畜を入れないだけで、ブッシュがよみがえるのである。しかしこのような地域では、政府やNGOが農民たちの放牧地である丘を強引に囲い込んで植林すれば農民たちと利益の対立すらおこしかねない。その土地を放牧地としてまた農民自身が植林を行い、森の管理・維持に携わること以外に成功の道は見出しにくい。だがそれは今まで農業と牧畜で生活してきた人々がその生活様式を変化させ、植林（森の維持）という要素を加えたやり方で、新しいライフスタイルを見い出せるか否かの問題である。

私たちにとっての環境保全

先進国にとっての環境問題が近代化に伴う汚染だった頃、すでに第三世界における環境問題は飢えをもたらし深刻な問題であった。アフリカにある環境関係NGOの現地スタッフは「環境問題の克服こそが、開発そのものなのだ」と語っている。環境保全とは、人間をしめ出して昔ながらの自然を温存することで断じてない。自然と人間の生活（生存）との間に新たな調和点を見出してゆくことだと考える。人間の側に立てば、ライフスタイルの変革運動である。そして、その主役は、日々の生活の中で、水や大気や土壌や森の問題と直面している人々自身である。断じて専門家でも政治家でもない。

〔追記〕

勉強不足のまま暴論を吐いた。建設的なおしかりを期待して止まない。



マーシャ村の植林と農業

JVCエチオピア，農業技術者 伊藤達男

生態的難民の発生

エチオピアは日本の三倍以上の国土と、三千年に及ぶ長い歴史を有している。1985年の人口統計によると、全人口は4200万人でその8～9割が農村部に住んでいる。人口増加率は2.9%でこれはほぼ24年間で人口が倍増することを予測させる。

今世紀初頭、国土の40%を占めていた森林は、1950年頃には16%、現在では4%以下に激減している。そして毎年20万ヘクタールの森林が消滅していると言われている。現在の森林面積は447万ヘクタールであるから、この傾向が続けば20～25年で、エチオピアにおける自然状態の森林は姿を消すかもしれない。

エチオピアの全農耕地の約3分の2は、25度以上の傾斜地である。1500メートル以上の高原地帯のほぼ半分の地域では、土壌の深さが35センチを下回っているといわれ、毎年ヘクタール当り20～40トンもの表土が流失していると推計されている。土壌流失防止対策が進まなければ、数世紀後には岩盤が露出し大地は不毛と化するのだろうか。そうだとすればそれより前に、農地としては実質的に使えなくなるだろう。

牛・ヒツジなどの家畜の総数はエチオピア全体で約7700万頭と見積られている。これはアフリカでナンバーワン、全世界でも10番目にランクされる数字だ。家畜は地表の植生を根こそぎ平らげ、山地の裸地化は土壌侵食を招く。

雨水の流出係数は高い。傾斜地に植生がなく浅い表土のエチオピア高原では、集中豪雨的な降雨も重なって、8～9割が土中に浸透せず地表を流れ去る。これは都市のアスファルト並の流出係数だ。

人々は自然の限界を無視して、現在のやむをえざる必要のために、生存基盤そのものを破壊している。自らが食糧を生産しているにもかかわらず、干ばつになれば零細農民の食糧備蓄は底をつき、糧を求めて農地を離れなければならない。

自然生態系の荒廃による犠牲者は常に貧しい農民である。このような人々は、「生態的難民」と呼ば

れている。干ばつによる難民化は自然生態系の破綻が表面化した一時的な現象に過ぎない。

極度の貧困の結果として生じた森林破壊や土壌侵食は限界に達し、今ではそれ自体がさらに貧困や難民を生み出す原因になっている。通常の生活においても、貧しい農民は生態的難民状態におかれている。

マーシャ村の植林・農業環境

マーシャ地区は首都アジスアベバのほぼ真北、エチオピア中央高原のテーブル台地（標高約3000メートル）の上に位置しているごくありふれた寒村のひとつである。

在来アカシアやヒノキの類がわずかに点在しているが、周囲はハゲ山同然だ。家々の周りや山に植林されたユーカリが所々に散見できる。

山々は農林省の管理下にあるので、住民が勝手に植林することは許されていない。一方、勝手に植えられる農家の敷地内植林に対する意欲は高いが、それは限られた広さでしかない。

山々の斜面から平地にかけては、耕地として利用されている。茶色の表土は浅く石がゴロゴロ。表土が極端に浅くなった所は、農地として使えなくなり、放置された畑も少なくない。雨水が集中する場所はV字形に深く削られている。

平地は黒土で深い、雨期には冠水しやすい上に、排水性が悪いので耕地には適さず、放牧地として利用されてきた。農地として残された場所は平地の放牧地だけで、そこも徐々に耕地への転換が進行している。

マーシャ地区には約3万人が居住している。ほとんどが農家で、その平均家族数は4～5人である。人口の約半分は15歳以下の子供だ。

エチオピアでは18歳ぐらいになると、カバレ（住民組織）から0.25ヘクタールの農地を与えられ（ただし最近では、若者に分配する農地がなくなってきたので、除外される場合もでてくる）。形式上は世帯主となり独立する。また総世帯数の2～3割は、女性が世帯主の母子家庭である。

農家は平均1ヘクタールほどの農地を耕作し、そこから得られる穀物収穫量はおよそ1トンである。平年作の場合この収量は、1年間の必要量をかろうじて満たすものだが、不作によって食糧不足に陥ることもまれではない。

この地区の主作物は大麦・小麦・カラス麦の麦類で、次に重要な作物はソラマメ・エンドウ・レンズマメなどの豆類である。ここでは麦と豆の輪作が基本である。土壌の肥沃度を維持するために休耕期間をとる余裕は失われつつある。

マーシャ地区における重要な家畜は牛とヒツジである。雄牛と雌牛はそれぞれ数軒に一頭の割合で飼われている。ヒツジの所有頭数の格差は著しい。荷を運ぶロバの所有率は20～30%と低い。富農はウマカラバをもっている。

農民にとって家畜は、役畜であると同時に財産であり保険でもある。家畜は食べるためではなく、税金の支払いや生活必需品購入のため、毎週開かれる定期市で現金化される。不作の年は家畜を売って飢えをしのぐ。貧富は家畜の所有頭数で決まるのだ。

家畜は農地と異なり非課税のため、農民は家畜を増やすことに熱心なあまり、自然環境が許容できる限界を無視しがちである。さらにまずい事には、家畜の糞は乾燥させてマキの代用として燃料に使われるので、農地にはあまり還元されない。

年間の平均気温は13～15℃である。2月～5月の間は比較的高温の季節であるが、30℃を上回することはまれである。低温の季節は10～1月で、時々0℃以下になり、薄氷が張ることもある。6～9月までの季節は、ほぼ最低5℃、最高25℃の範囲内で変化する。

雨の季節は小雨期(3～5月)と大雨期(7～9月)に分かれる。その間に長い乾期(10～1月)と短い雨期中休みの時期がある。

作物の栽培時期は小雨期作と大雨期作の2回である。だいたい地形により、斜面の畑は大雨期作用、平地の畑は小雨期作用とされる。収穫期は5～6月と11～12月である。植林用の苗木は1月から6月までの半年間苗木で育てられ、7月が植付けの適期となっている。

マーシャ村では毎年1000ミリ程度の雨量があり、その大部分が大雨期の3カ月間に集中する。この雨

は収穫をもたらす恵みであるが、また容赦なく表土を奪う悪魔でもある。言い方を換えれば、この雨は人々の一時的な生存を保障するが、人々の生存基盤である大地は、確実にその代償を払わされている。

1986年以降、JVCではマーシャ村における農産物の市場価格調査を実施している。3年間の調査結果から、大雨期作収穫後の乾期には価格は下落し、小雨期作収穫直後を除いて雨期の間中、価格は上昇するというパターンを読み取ることができる。

1987年マーシャ村は干ばつに見舞われたが、JVCによる食糧援助(労働の報酬として食糧を配給する/フード・フォー・ワーク)も幸いしてか、市場価格から見ると比較的落ち着いた3年間だったと思われる。それでもこの間の価格変動すなわち最高と最低の価格差は、作物の種類にもよるが、2～3倍になっている。干ばつの被害がもっと大きければ、この価格差はこれ以上に拡大することが容易に予想される。

植林・農業プログラム

1987・88年の2年間で、生産した苗木本数は約70万本である。そのうち60万本はユーカリで、残りの10万本はアカシア・ヒノキの類とその他の在来種である。1989年の苗木生産予定は40万本。

JVCによる山間部への植林面積は合計75ヘクタールである。補植分も含めて約15万本の苗木が植えられ、残りの55万本は農家の家庭植林や学校・協同組合・クリニックなどの公共施設に配布された。

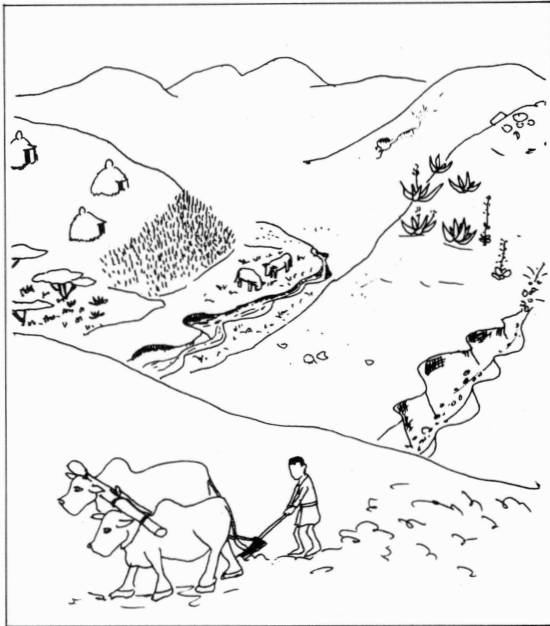
植林サイトに植えた苗木の生存率は、大体50%で、ユーカリは2年で1メートル以上になっている。これは岩山同然の植林場所にもかかわらず、また農林省による植林結果と比べても、高いものとなっている。良質な苗木、適切な植え付け、その後の土寄せなどが有効だった。小雨期の早い開始も幸運だった。

ユーカリはオーストラリア原産で、エチオピアにはほぼ百年前に導入された。劣悪な自然条件にも耐え、しかも成長が早く何回でも伐採できるなどの利点により、高原地帯に植林されている樹木は、ほとんどユーカリで占められている。だがこのユーカリは土壌中の水分を保持する能力に乏しい。

JVCの植林サイトは表土が浅く、在来種といえども容易に根付かない。岩山の様な所に植林するには、

マーシャ村の土壤保全

〔保全前〕



ユーカリにまさるものはないが、表土が深く条件の良い所には、他の在来種を植え水源林にすべきだ。

農民による家庭植林の場合、植付け場所には植穴を掘らずに、畑の要領で耕起し密植する。この様にすれば乾期中の地割れを防げるので良好な結果を得ている。しかし乾期が長びくと、土壤水分の不足で枯死するケースもある。

アカシアは植え痛みがひどく活着するのに時間もかかる。ユーカリは最も人気のある樹種だ。10年もせずに立派な建材になるからだ。しかし家畜の糞がマキの代用をするので、マキに対する関心は低いというのが本音かもしれない。アカシアやオリーブの野生種の枝は農具の柄としても利用される。

苗木の配布を始めると、村民数百人が苗床(苗木)に殺到した。それほど欲しいのなら自分で生産したらよさそうなものだがそれをしない。また折角ポットに苗木を育てても、土は重いのでポットの土を落して持ち帰る連中もいる。

我々が今できるところから手をつけ、最終的に目指している農業は、一口で言えば、自滅的な収奪農業ではなく、持続可能な農業、しかも干ばつに備える農業システムの確立である。

例えば、放棄された農地が散在する山々には、岩

〔保全後〕



盤が露出する前に植林することによって、土壤の流出を防ぎ水源林とする。小さな谷間に自然状態に近い植生が残っていれば、囲い込んで保護する。

斜面の農地は等高線に沿って段々畑状にテラシングを施し、またV字形に削られたガリには石でチェックダムを多数作って土壤の保全を計る。農地には適当な間隔に防風林を設け、強風から作物を保護する。苗木の配布によって農家の周囲にも植林を促す。マキの供給が可能になれば、家畜糞は農地に還元できよう。

家畜は過放牧を回避すべく自主的に制限し、さなければ干ばつという制裁が、増え続ける家畜頭数を抑えるだろう。

将来的には、天水農業から脱却するため、小規模なダムや水路の建設も有効だろう。現状のままではダムはすぐに埋没するから、十分な土壤保全が肝要だ。

堆肥の投入による増収効果も期待できるが、土壤保全、植林はすべてに優先する様に思われる。

1カ月間の農業教室を通じて、できるだけ多くの農民との交流を計っている。1回の訓練コースには30~50人が参加する。これを年間8回行う予定。チェックダム・テラシング・植林作業を実際に試み、

彼らの意欲を刺激する。その中からひとりでも多くの自発的な若者が出てくることを期待している。

今後の課題

生態的難民の発生原因は生態系の破綻にあるが、それは原因であるよりも、むしろ症状であると言った方が適切のようだ。なぜならば、政治の貧困、人人の意識、社会構造と深くかかわっているからだ。

戦費は国家予算の半分を占め、これらは農民の税金でまかなわれている。干ばつ被災地域の農民からも税金を取り立て、収穫物の供出を強要する。農民は税金を納めるために家畜を増やし、それがまた過放牧を助長し、山々の植生は荒されて土壌侵食が加速化する。

農民には農地の使用権はあるが、世襲ではないので、いつ取り上げられるかわからぬ木を農地の間に植える動機を欠いている。山は農林省の管理下にあり、住民の手による植林地からも、彼らは直接利益をうることはできない。

もっと農民を信頼した政策を取れないものだろうか。しかし農民の側にも問題がないわけではない。農民同士の妬みはやり切れない。他の連中より良い収穫を得たため家に放火されたケースもある。他人の成功を見て、見習うことをせず、足を引っばる。どうして建設的な方向にいかないのだろうか。

農家の住居は広い地域に分散している。地形の陰しさも手伝って、住民同士の協調関係も希薄だったのだろうか。また、封建制度の階層的な社会構造の中で、農民同士の水平関係よりも、地主との垂直関係が支配的だったとも考えられる。

農民はアメとムチという両極の間を、揺れ動いて

いる。外国からの援助というアメと政府の命令というムチの間を。

農民であるが故に食えないという不思議な構造(都市の労働者、金持ちは飢えることはない)が農民をして生態系のバランスを壊す方向に、いっそう追いやっている。

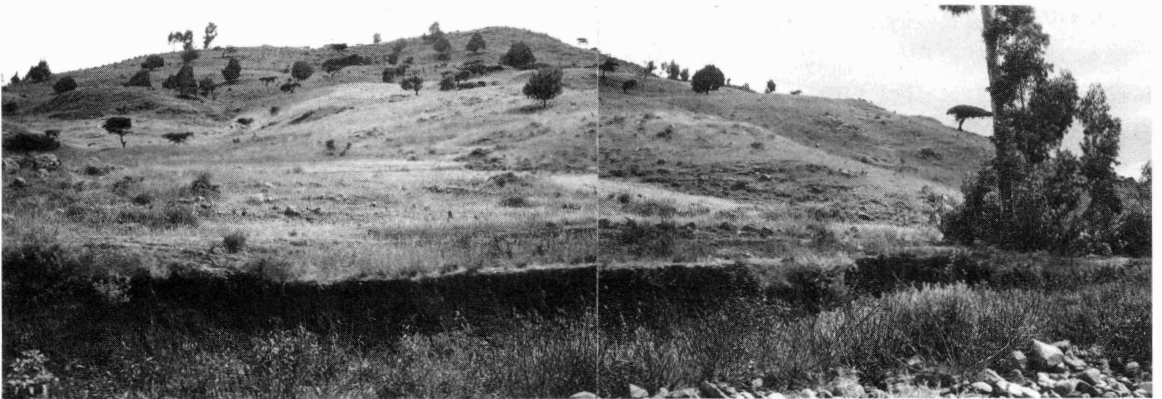
予算がないからお役人は積極的に仕事に取り組めない。農林省の植林ノルマは中央で決められ上意下達式に順次地方レベルに降りてくる。毎年ノルマを果たすために、地方の役人は新しい植林サイトを拡大する。苗木の残存率が低いにもかかわらず、補植しないから、後に残るのはテラシングの跡だけだ。

農林省の植林活動に対して食糧援助という形で関与し、特に植えっぱなしの状態を改善するのを後押しするアプローチを進めている。

農民の中には、土地なし同様の農民が出始めており、潜在的失業状態の人々もいるだろう。フード・フォー・ワークの長期化は、農民の生産意欲を低下させるので、キャッシュ・フォー・ワークに変えるべきだとの意見もある。しかしこれでは、土地への人口圧力を軽減することにはならない。

別の見方をすれば、フード・フォー・ワークをもっと徹底する方法もあるかもしれない。一時的・部分的に農地の休耕期間を奨励し、その間土壤保全・植林などの対策を進める。その後農業活動を再開する。

これは非常に危険な発想であり、常識を逸脱しているのだが……。しかし生態系の荒廃は、常識を越えたところに、さしかかっているように思えてならない。ジレンマは全てにつきまとうだろう。無関心は何ものも変えはしない。



村にはほとんど木が残っていない

交渉は9回転んで10起きる

JVCエチオピア代表 鈴木直喜

プロジェクトを行うためには相手国政府と契約を結ばなければならない。いくらNGOだからといって勝手によその国で活動するわけにはいかないのだ。しかしこれがなかなか一筋縄ではいかない。対象者にとってもっとも有効で、資金的にも無理のないプログラムをたてようというNGOと、より多くの資金を落としてほしい現地政府の思惑の違いがあまりにも大きいからだ。こうなると“清く正しいボランティア”をかなぐり捨て、したたかにねばり強く現地政府と交渉を続けるしかない。

12月29日、RRC（救援復興委員会）プロジェクトセンターのテドラ氏と2時に彼のオフィスで待ち合わせる。いつものように決まりきった挨拶をし椅子を勧められる。彼の表情は相変わらず厳しい。

「鈴木、どうだと思う。私の作った案だが」

1986年4月に始まったプロジェクトの契約期間が88年の4月で切れる。その更新のために今日もRRCに足を運んでいるのだ。3月にエチオピアに来た時には5月ごろには更新できと思っていたがやはり甘かった。RRCの評価チームがマーシャ村に入ったのが4月の終わり。そしてレポートが出たのは9月の初めになっていた。

“ありがたい”レポートを元にテドラ氏との交渉は続くが、果たしていつになったら更新できるのやら。外国人枠ゼロ、フード・フォー・ワークをキャッシュ・フォー・ワークに、更新期間は2年……。

「どう思うと言われたってこまる。だいたい1人も外人枠を認めないのは無茶だ。日本人無しではお金も集まらん。フード・フォー・ワークを止めたら1000トン以上もある穀物はどうする。マーシャ付近の収穫は良かったものの充分じゃないんだ。期間だってもうすでに契約更新の交渉で8カ月すんでしまったし、このままじゃ更新する前に更新期間が終ってしまうではないか」と冷静に耐えない私。

しかし彼はクールに「このプロジェクトなら充

分エチオピア人だけで、しかも2年でできる。収穫が充分じゃないなら証拠の手紙を持ってきてくれ。考慮するよ」

「……でも、この契約更新は88年4月にまでさかのぼるわけでしょ。それなら日本人スタッフはその時から今も現場で働いてるし、ゼロは矛盾するんじゃない。（おっと、あんまり感情的になってはまずい）

日本のNGOはまだ歴史が浅く、日本人が現地で働くことにより一般市民にはたらきかけるところ大であり、それで資金集めもしているの、日本人がゼロでは日本に還元もできないし、実質的には無理だ。更新だって2年といたって、結局この交渉で8カ月経ってしまったので実質1年しか残りが無い。わかって下さいよ」

「前にも言ったように、このプロジェクトはエチオピア人だけで充分だ。日本の事云々に関してはエイドコーディネーション（RRCのNGO窓口）に言ってくれ。それから期間のことだが、君たちは交渉中だってプロジェクトは実施しているだろう。2年で充分だ」

「……もちろんプロジェクトは続けているが契約なしではできないこともたくさんあるし。88年12月までは緊急食糧援助で忙しかったんだ」

「まあいい。評価の結果作られた案がこれだ。質問があるならボスに言ってくれ。私の仕事はこれまでだ」

結局次の日、彼のボスのテシヨメ氏に会い、JVCの要求をもう一度お伝えした。JVCエチオピアに関する日本の新聞記事の切り抜きを見せたのが良かったのか、それとも卑屈になっている小生に哀れみを感じたのか、テシヨメ氏は好意的に我々の要求を受け入れてくれた。その後10回以上に及ぶ交渉があったものの、当初考えていた契約内容にかなり近づいてきた。

エチオピアでは七転び八起きでも足りず、十起き以上が要求される。そういえばエチオピアの言葉で10はハッスル（アッスル）だったっけ。10回転んでも、夢と希望は持ち続けたいものだ。

ソマリアの植林プロジェクト

元JVCソマリア・コーディネーター 荻ノ迫善六

緑はたいした問題ではない。／

「植えた木にやる水をくれ。／」とキャンプ内の雑貨屋のおじさんたちが1メートルほどになったインドセンダンの木の前で、巡回中の私に頼む。その口調には（こんなに木を大きくしてあげたのだから、水ぐらいくれたって）という感情があるような気がする。彼らの緑に対する感覚と、我々（とりわけ日本人）との間にはギャップがあり、それは富む者と貧しい者（あるいは恵まれた者とそうでない者）との相違、そして、生きざまの違いにまでかかわっているような気がするほどだ。我々の緑を増やしたいという切望と、彼らの緑に対する思いには隔たりがありすぎる。キャンプという仮住居の暮らしでしかない彼らにとって、緑はやはりたいした問題ではないのだ。労働力が女性中心の家族形態にあっては、仕事もなく、生きがいもない男たちにとって1本の樹など1銭にもならないのである。しかも、いつかはここを去るかもしれないのだという思いは、水やりの中心である女や子供たちにも影響し、苗木は遅々として大きくならない。キャンプ内をまわりながら、「ここに緑がいっぱいあったら」と胸熱くなるほどの思いが込み上げてくる。そして一晩で10センチも伸びる木はないものだろうかと思う。

「もっと緑を増やそうよ」と何度繰り返しても、「木を増やしてどうするんだ。いったいどんなメリットがあるのだ」という言葉の前には絶句してしまう。ついに住み家でないキャンプに住む彼らに、炊事用のまきの伐採による大地の裸地化現象を述べて、その責任と義務を説いても、ウンウンとうなずくだろうが、翌日苗木をもらいに来るわけではない。もらっても確実に育てるわけではない。彼らの心の中には、ボランティア活動をしている我々JVCに少しは協力してあげようという意識があり、また、協力参加することで何らかの「もらい物」や「施し」を期待する。（これは彼ら難民たちを侮蔑しているわけではない。約10年も続いた食糧、水、医療等の援助活動が彼らに及ぼした悪影響のひとつであり、ここから「依存症候群」といわれる彼らの共通した態

度が表われているような気がする）

「苗木を植えたら何かもらえるの？」

「なんにも。でも自分の庭に日陰ができるよ」

「水はどうするの？」

「手を洗ったり、皿を洗ったのを使えばいいんだ。わざわざ川から汲んでくることはない」

「大きくなるのに何年かかるの？」

「さあ、君しだいだよ。水を毎日やればそれだけ早く大きくなる。1年も続けて水やりしたら、あとはほったらかしても自然に大きくなるのだ」

植林プロジェクトは、金もかかるが長い期間が必要で、それには忍耐が求められる。時間と金と嫁さんさえいれば、ここソマリアで植林プロジェクトをやりたいと思ったほど、この乾いた大地に緑を増やす仕事はやりがいのある仕事だろうと思う。

農場内の樹々

プロジェクト開始以来、農場の主水路の両サイドにイピルイピルを植えることをひとつの大きな前提条件として、先人達そして我々も畑の中の植林には努力を重ねてきた。現在高さが10メートル、直径30センチにもなるイピルイピルがユニット2から5までの農場にうっそうと繁り、農民の自宅の柱に使われるまでに成長した。その樹々の下には若い木が群生し、もう手を加えなくても自然に成育するまでになっている。その若木の束は家の壁用に売られ、収入源のひとつになっている。生長の早いイピルイピルがもうかると知った農民たちは自主的に木を育て、植林区を広げてゆく。土地の悪い場所についてこちらがアドバイスする必要もなくなりつつある。また、この木の葉は動物のエサとしても最適で、乾期に入ると泥棒退治の見張りをつけなければならないほどだ。

農場内の植林作業に拍車がかかり始めたのは、モデルファームにナーサリー（苗床施設）を86年9月に造ってからのことである。ここでは、農場に適したイピルイピルのみでなく、この地に適した森林用、緑陰用、農場用の樹品種を、外来に限らず現地産も

含めて試験育成し、サンプルプロットを設け、またアグロフォレストリー法を導入した実験農場もスタートした。

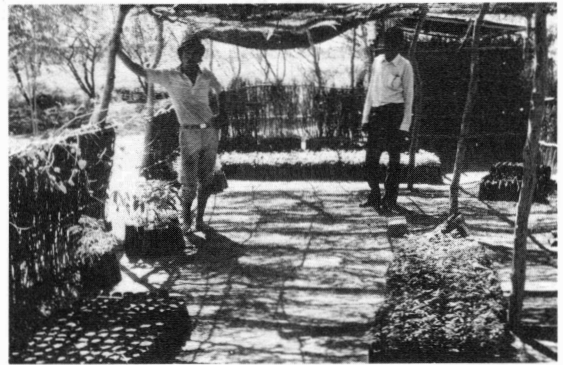
その作業結果から得られたのは、農場用としてはイピルイピル、パーキンソニア、パパイア、グアバ、レモン、マンゴ等で、緑陰用としてはインドセンダン、プロソピス、パーキンソニアなどであった。ローカルの品種は人工的には育てにくく、また生長がきわめて遅いこともあり採用しにくいということも判明した（主にアカシアの類である）。

このナーサリーでは、その後苗木の大量増産をめざし、イピルイピルを中心に農場内に普及する大きな原動力となった。また、キャンプ内の家庭緑陰用（コミュニティ・フォレストリー）としてインドセンダン、パーキンソニアの2本組をセットで配布し始めた。

ナーサリーから各農民は自由に約10本単位で持っていく。その人数は日毎に増え、当初は苗があつという間になる状態が続いた。種子を集め、育成用の土や牛糞を集め、種を播き、水をやり云々という連日大忙しの状態は約1年は続いたであろう。その数約3万本。

ところで、土壤疲弊、グループ（28家族）の無統別、管理不能を理由に87年9月に中止したユニット1＝ハルガン・ファーム（闘争の意で、文字どおり内部闘争が続いた）は、紆余曲折を経て88年4月、地元民14家族をメンバーにして再出発した。この人々を選んで農民にしたというのは、結果的に良かったと思う。半年以上彼らは自主的に全員で植林作業に精を出し、文句も言わず、施しを期待することもなく、一致団結して現在も継続している。枯れて何もなくなったこの農場に緑がよみがえり始めたのだ。

ハルバ地区には現在8農場103ha（196家族）がある。ここでは彼ら農民たちが自主的に苗作りから行うようトレーニングを実施し、苗木用のプラスチックポット、種子を配布し、農場内に苗床を作るともくろんだのであるが、1部の成功例はあったものの失敗した。これは管理能力不足、自主的な活動の意欲が低いことなどによると見られる。また、このハルバ・キャンプのコミュニティ・フォレストリー用に第3のナーサリーを作り、ここで苗木生産を始めたことにもよるだろう。



苗床。手前の苗がインドセンダン

したがって、現在この地区の各農場には、このナーサリーから苗木を配布している。その需要は高く、JVC以外の農民グループからの依頼に応えられない状況である。

コミュニティ・フォレストリー（難民キャンプ）

ナーサリーを造った目的の1つに、農場のみでなく、各キャンプ内にも緑をふやしてゆくというコミュニティ・フォレストリー作りがあった。

まず農場内のモデルファーム、次いでマガネイ・キャンプに第2の、ハルバ・キャンプに第3のナーサリーが増設され、地域に緑を増やす体制はでき上がり、苗木増産は続いた。キャンプ内の共有地（モスク、小学校、コーランスクール、雑貨屋）を中心に、穴掘りのデモンストレーションから水やりまで指導し、苗木を配布していった。インドセンダンとパーキンソニア、各々約5000本である。

さて、その配った苗木のうち、いったい何本生き残り、そして育っているのか、私が滞在していた88年11月の時点では、両種合わせても1500本ぐらい（推計）であった。統計でその結果を見ようとするただ絶望観に襲われるばかりである。苗木を欲しがっている人々がいるなら配布し続けること。ただし方法を変える必要はあるだろう。

約3メートルにもなっていた最初に植えたインドセンダンの木の1本が我々の苦労をねぎらってくれる。ユニット5の主水路に繁ったバーミューダグラスの上に坐り、大きくなった樹の下で流れる水に素足をさらしぼんやりしていると、涼しい風の音が聞こえてくる。一度だけその草の上で昼寝をしたかった、と思う。

難民キャンプによる環境破壊

元JVCソマリア代表 鳴 紀晶

難民キャンプが自然のバランスを崩す

人が住むところに社会があり、その社会と自然環境は大きく関係している。難民の場合、戦争や干ばつなどにより脅かされた生命の安全、人権の保護を求めて長年暮らしてきた土地を捨て隣国に逃避する。が、その逃避先の土地では居住・耕作条件のよい所はすでにその国の人々が暮らしており、難民に与えられる土地は今まであまり人が住んでいなかったようなところとなるのが相場である。そのような自然の恵みの乏しいところに、大量の難民が一度に集まって生活を始めるのだから、その土地が保ってきた環境のバランスを大きく崩してしまう。またその土地が東南アジアのように高温多雨で自然条件の恵まれたところならまだしも、ソマリアのような半砂漠地帯では少しのことでもその影響は大きい。

もちろん、彼らを外界から完全に切り離れた収容所のような所に入れ、食糧、水、住居、薪などを供給するのであれば、その地域の社会、自然環境を崩すことにはならないかもしれない。タイのカオイダン難民キャンプは有刺鉄線で囲まれ、食糧、水はもとより、住居用の資材の竹、薪用の古いゴムの木も供給されていた。私がこのカオイダン・キャンプで活動していた時は、キャンプの中にもう少し緑が多くなれば人々も住みやすくなるのと思うぐらいで、その時の関心はむしろ、難民たちがいつ祖国に戻るか、また第三国に行けるかということや、基本的な人の自由が制限されている彼らの社会的問題であった。

パキスタンではアフガニスタンからの難民によって、木々が住居や薪用に伐採され、その地域の砂漠化に大きな影響を与えていると聞き及んではいたが、ソマリアに来るまで正直いって実感はなかった。ソマリアにいる難民は数も多く、その地域の人々との間に文化、社会的問題を抱え、援助の資金も限度に達している。タイのカオイダンのようなキャンプはそうないのだということと、人間が自然に及ぼす影響の大きさを知った。ソマリアは東南アジアから見ればはるかに自然が貧しく、半砂漠地帯にはとげのある低木が広がるばかりである。その中でもより条



とげのある木がどんどん切られていく
件の悪いところに大量の難民が集められているので、
その地域の自然には大きな負担となっている。

マグドール・キャンプの建設

1984年12月、私はエチオピアから干ばつと社会不安のため流入した難民の緊急救援を行うためソマリアに飛んだ。その時JVCはすでに1977～78年のオガデン紛争の際に出て来た難民の自立のための農場を1983年から実施していた。ジュバ川を利用し灌漑した50haの農地は緑がいっぱいで、もうほとんど木の見られない難民キャンプ周辺との差に驚かされた。

私が現地入りしたころは、新しい難民たちは UNHCR の現場事務所前に住んでいたが、既存のマガネイ (MAGANEY) とドリアンリー (DORIANLY) のキャンプの間に新たにキャンプを設けることになった。名前は2つのキャンプの頭の部分をとってマグドール (MAGDOR) とした。ここは人が住んでいないこともあり、他のキャンプに比べてとげの木もまだ多く見られた。

しかし、彼らが移されるとそれらの木の多くが住居用の資材に、また日々の煮炊き用の薪として切られ、あっという間に他のキャンプと変わらないようになってしまった。彼らに「木を切るな」と言ってみても、カオイダン・キャンプのように建築用資材や薪が支給されるわけでもなく、木を切らなければ生活することができない。貧しい土地なので大きな負担がかかれば、再生するのは非常に難しい。だから難民キャンプのつくり方を考え、その土地に負担

をかけないように小さな規模のキャンプをほうぼうに設ければいいのではと思ったりしたが、現実的には難民＝よそ者ということで、受け入れ政府が管理しやすいように、また国連をはじめとする援助機関が合理的、効果的に援助活動が行いやすいように難民を集めるのである。

ソマリアのルークには8つのキャンプがあり、16万人の難民が集められていた。もちろん政治的な理由で世界の難民の多くは国境近くに住まざるを得ないこともあるのだが、やはり土地への負担は非常に大きく、日々木が失われ土地が荒れていく。ここは雨が少なく、ブッシュの木は成長が非常に遅い。このマグドール・キャンプの土地が難民の入ってくる前の状態にまで再生するにはいったいどれだけ時間がかかるのだろうか。それとも再生できず砂漠への道を進んでしまうのだろうか。まったくわからないが、故に非常に不安になったりした。

どんどん木が切られていく

新難民に紛れ旧難民や地域住民が食糧カードを受けていたので、誰が新難民であるのかを明確にするため、その後マグドール・キャンプは、車で800km離れたソマリアの内陸地にキャンプを新設することになった。我々は既に新難民に対して保健、補助給食活動を行っていたので、新キャンプ地の設定当初から政府、国連とともに準備を進め、その候補地に現地視察を行った。その土地は一面ブッシュで覆われていて、ルーク地区にあるマグドール・キャンプよりも格段に住みやすいだろうと思われた。後で聞いたところではその地はジャボレと呼ばれていて、それは「薪の多いところ」という意味であった。

このジャボレのブッシュを少しでも多く残すために、難民たちに現在のマグドールの家を解体して持ってくるように伝えた。しかし予想通りというか、人々が移ってから毎日木々は切られ、1年後にはキャンプ地のブッシュはほとんどなくなってしまった。彼らがすべて悪いのではないことはわかっているのだが、あまりにもどんどん切る人々に対して腹をたててしまい、「なんでそんなに切るんや、もう少し木を大切に必要最低限には出来んのか、お前ら切りすぎやぞ」と言ってしまったこともある。彼らのなかにも木の大切さを理解しているようなことを

言う者もいるが、実際は“今日の前にあるものは手に入れる”という遊牧民の発想のためか、我々から見れば何も考えずに切りまくっているというようにしか見えない。ブッシュが広がっていたもとのジャボレを知っていたことや、ジャボレ・キャンプがその周辺地域から見ると円形脱毛症のようにハゲていくのを目のあたりにし、伐採されつくしたルーク地区のようにしてはいけない、今、手を打たなければと感じ、具体的に植林活動を開始したのである。しかし植林の最終イメージは、活動を行いながら試行錯誤をくり返し変わっていったのが事実である。そしてそれにより、活動のアプローチも変化した。

植林の試み

まず彼らに、「木はいいな、木がほしいな、自分たちも木を育てたいな」ということを感じてもらうために、キャンプ内に1haと4haの土地を植林区として確保し、3haの土地にイビルイビルやインドセンダンをはじめとした雑多な種類の木を植えた。降雨量が少ないので天水には頼れず、毎日川からポンプでくみ上げた水をロバの荷車で運び水やりをした。水の供給が足りなかったのか、木々の生長は非常に遅く、最終的にはバケツで一杯一杯水をやったにもかかわらず、デモンストレーション植林区として希望していた結果は得られなかった。

デモンストレーション植林区と並行し、難民自身が家のまわりに植林するように苗木作りを行い、雨期に合わせて適時配布した。家に1本や2本の木があれば日陰ができて快適になるので要望も多く、我々は苗木配布とその植え方、世話の仕方を教えるだけでよかった。植樹から風よけ作り、そして日々の水やりなどすべて彼ら自身でやらねばならなかったのだが生育状態もよく、1本1本順調に育っていった。

しかし毎日の煮炊きのために木々はどんどん切られていった。それは自然の再生能力をはるかに超えていると思えた。木が少なくなればなるほどその土地に湿気がなくなり、風や直射日光を受けて土地はさらにその再生能力を失う。デモンストレーション植林区も彼らが家々のまわりに植えた木も、日々に切られてゆく土地の木々から比べれば大した数ではなく、我々が植林活動を行うに至った動機を十分に満たすものではなかった。

植林活動の今後と問題点

ではどういう手段があるのだろうか。キャンプ内は家庭植林活動を続けるとして、キャンプのまわりの地域に植林区を作ることが考えられる。しかしいくらイピルイピルやインドセンダンなどが乾燥地に適し、少しの水分で育つといっても、年間降水量が200～300ミリの土地で木が自生できるようになるまでは人工的に水をやらなければならない。簡単な灌漑施設を設けるにしても多くの資金が必要だ。また人手もいる。なるべく機械に頼らず人海作戦で行おうとするのだが、それには機械にばかり頼っていると万一故障した場合に活動が止まってしまうということと、労働の機会を広げるという二つの意味があるからだ。

しかし、この人海作戦は人々が仕事に対する動機や理解、共感というものがなくなかなか成功しない。もちろんこれは我々のマネジメントの力量が問われるのかもしれないが、ソマリアで人々と働いてこのことを強く実感した。植林区を設けても人々は家畜を入れたりする。それがくり返しくり返し行われると、我々は何なのだろう、なぜ彼らの協力が得られないのだろうと考え込む。

木が日々切られて一番困るのは薪集めに行かなければならない女性や子供である。薪のある所はしだいに遠くなるのだ。しかし移動を常とする遊牧民の性格だろうか、なくなればあるところまで行くだけで、切ってしまった土地のことはあまり気にしないのかもしれない。木を育てることによって薪集めの労働が将来的に軽くなってゆくと伝えても、薪として使えるようになるには長い期間が必要で、いずれ去ることになるキャンプに木を植えてもしかたがないというのが本根だろう。実際、キャンプの人口、1万6千人分の薪を供給するための木の生産はよほど集中的にやらねば不可能だ。たとえそれができたとしても、目的が共有されていなければきちんと仕事をしないと、物を盗むとかいろいろな問題で頭を痛めることになるだろう。それに生産された薪を一方的に配給する側とされる側という関係になってしまう。そうなると、やれワシの方が量が少ないというような苦情が持ち込まれる。そして我々は彼らとこのような関係を創りたかったのかと思うに違いない。

そこで思い出すのが、人々が自分の家にいそいそと植え、愛情を注がれがんばっている木だ。植林活動の対象が明確でなく、試行錯誤を繰り返してきたが、鍵はそのような家庭植林のように思う。彼らが家に植えている1本のその活動が、キャンプ内の学校や病院などの公共の場所に広がり、やがてキャンプ周辺の植林や保護区の設置にまでいけばいいのだが、現実化するにはまだまだ時間がかかりそうだ。

その保護区とはどういうものなのだろうか。ジャボレ・キャンプの場合ルークとは違い、枝がなくなっても生きている根かぶが残っている所がまだあるので、これらの木が再生するように土もりをし雨水が根元に集まりやすいようにしてやる。その際人や家畜が中に入らないように囲いをするのだが、ただ彼らを遠ざけるのではなく、彼らが植林への理解を示し、共感してくれるような動機づけが必要だ。そして人々の中に入り、ポイント、ポイントを見極め適切な助言や助力をする。家々に植えられている1本1本の木のように愛情を注がなければ、いずれ木々はすべてなくなってしまうだろう。もちろん大量の資金を投下し、機械などを使い人工的に植林区を設ければある程度緑はできるだろうが、そういうやり方だと最終的には彼らによってみごとに切りまくられるという運命にしかならないと思う。

難民は自然災害や戦争などによって、大量に、突然に押し寄せる。そしてその数は時には受け入れた土地の再生能力を超えてしまう。難民問題とは人道問題であるが、同時に自然環境問題であることも忘れてはならない。JVCはこれまで難民の自立のための農場建設を行ってきたが、一方では緑への挑戦の意味もあった。難民キャンプというのは、自分たちの保ってきた社会が一度壊された人々が集められてできた所である。新しい秩序もまだ混乱している。そういう所に入って人々といっしょに仕事をするというのは簡単なことではない。が、JVCのやりかけた仕事はまだまだ途中である。彼らと協力しあい砂漠化をなんとかくい止めたいと思う。

ジャボレ・キャンプの植林区。水が足りず枯れた。



砂漠化とたたかう NGO

サヘルの会

〒151 渋谷区上原1-22-7
永井ビル1F
TEL 03-460-3912



サヘルの会はこの1月25日で満2周年を迎えた。代表はJVCのソマリア、ルーク農場建設の中心メンバーだった高橋一馬さんである。高橋さんは高校生のころから砂漠を緑にしたいという夢を持ち続け、とうとう1昨年その夢を実現させようという仲間たちとサヘルの会を結成するに至った。サヘルとは岸辺という意味でサハラ砂漠の南縁を指す。80人のメンバーで発足した会も、この1~2年環境問題に対する関心が高まったこともあって、現在の会員数は603人に達している。

マリのファギビンヌ湖北岸のティンナイシャ村にボランティアが住みこんだのは昨年の2月。ようやく村の様子がわかってきたところだ。現在は3~5人のメンバーが植林と農業援助を行っている。

ティンナイシャ村の人口は30~40家族、(150人)。1974年、干ばつ被災民キャンプに収容されていた人々のなかから農業による定住希望者100家族1500人を政府とAFSC(クウェイカー教徒のNGO)が移住させて村を作ったのが始まりだ。翌年第2グループの100家族が加わり、83年の豊作時には220家族にまで人口が増えた。しかし84年の大干ばつの時はほとんどの村人は村を棄て、後に村に戻ってきた人を含めても最盛期の半分にも満たない。彼らは国連やマリ政府から食料を配給してもらい、あとは細々と出稼ぎなどで暮らしている。

サヘルの会が村に入った時、村人はNGOがまた何かくれるんじゃないかと期待していたという。ボランティアの宿舎の隣に移り住む人さえた。しかしサヘルの会でははじめから人々に物資を配ることは考えていなかった。それよりも援助依存症をなんとかしなければと思っていた。村人の多くは遊牧民だったため簡単な農業しかやったことがなく、木を植える方法も育て方も知らなかった。サヘルの会では村人自身が農業や植林をする気にならなければならなかったと考えた。村の一角に農地を借り、野菜や樹木の苗を育て、ほしいという村人に与えることから始めた。なるべく無理のない方法で農業が行えるように、外から機械を入れることは避け、柵などの資材も村で調達できるものを使った。畑として使われている所は干上がったファギビンヌ湖の湖底で、2~

3メートルも掘れば農業用の浅井戸は掘ることができる。

サヘルの会は期待したような援助物資、仕事はくれないと知った村人は、今はメンバーの活動をそっと見ているという段階だ。それでも何人かの村人が農業や植林に関心を示し、苗木などをもらいに来ている。一方、食べる物が無い人には午前中サヘルの会の畑を手伝ってもらい、その分食糧を与えている。が、大規模なフード・フォー・ワークは、村人たちの依存心を助長することはあっても、やる気を起こさせることにならないと、今のところするつもりはない。少しでも多くの人が技術を習得し、自分たちで積極的に植林をしようという気になるのを辛抱強く待っているところだ。

しかし、自然の力に人間は押されぎみだ。この地方は87年も干ばつに襲われ、食糧を配るということとはしないつもりだったサヘルの会も昨年は緊急食糧援助をせざるを得なくなった。またバッタに植えつけた野菜や樹木の芽を食べられてしまうことも経験した。これまで村人たちは条件の良い所へ、所へと移動し、その動きの中で土地の回復を待った。しかし砂漠化の進行が早く、砂に埋もれた村があちらこちらにできている。人々がこの土地に踏み留まらなければ砂漠はさらに広がるだろう、まさにティンナイシャ村はその前線基地で、高橋さんがこのあたりで植林をやりようと思ったのも、湖に近く水源を確保できと思ったからである。

サヘルの会の事務局長で、現地でのリーダーでもある小島通雅さんは干ばつやバッタの害にも泰然自若としている。そんなことにいちいち目くじらを立てていては砂漠には暮らせないということか……。小島さんとしては、「ファギビンヌ湖北岸の住民がよそからの援助に頼らずに地域の中で食えるようになりゃいいよ」と、当面の目標は村づくりに置いている。村人がいてこそその農業であり植林だからだ。

株式会社「砂漠に緑を」

〒168 中野区本町3-29-14
TEL 03-373-9772

株式会社「砂漠に緑を」は、専従、ボランティア、合わせて職員20人前後の小規模の会社である。株式会社といっても利潤を追求するわけではなく、マングローブの植生を研究していくことにより、地球の将来の緑化に役立てることを目的としている。

代表取締役の向後元彦さんは、1977年にクウェートを訪れた時に、石油で豊かになった人々が緑に対して強い憧れを抱いているのに気がついた。この砂漠を緑にできれば大金持ちになれるのではないかという思いに駆られた向後さんは、帰国後知人たちからのカンパで砂漠緑化のための会社を設立したのである。

そしてまず、砂漠緑化のポイントになる水の問題を解決するために、豊富な海水を利用して育てられるマングローブを樹種に選んで調査を始めた。マングローブは海水中の微量要素を養分とするのでコストはかからないし、植える方法さえ見つければ後は手間がかからない等のメリットがある。しかし、もともと熱帯植物であるマングローブは寒さに大変弱いので、アラビアで育てるには、防寒の囲いで苗を保護してやるような苦労もあった。

このマングローブ研究には、2つの石油会社がスポンサーとして協力してくれたおかげで、アラビア半島の2カ所で合計約3万本のマングローブを植えて育てることに成功した。大きい品種のものは、植えてから5年ですでに2.5メートルまでに育っている。この実績により、職員の一人が日本政府派遣のマングローブ専門家として、同じくアラビア半島で現地への技術移転プロジェクトに当たっている。「砂漠に緑を」の活動地は今や世界中に広がっている。ユネスコの下でのマングローブ地域計画からの委託が続く、マングローブ林の破壊、減少が進んでいるパキスタンやバングラデシュにも、職員をアドバイザーとして派遣してきた。

「マングローブのうしろに人間が見えてる」と向後さんは言う。マングローブ林があれば、そこに魚貝類が住みつき、人間もそこでマングローブ生態系の一員として共存していける。マングローブの持つ無限の効用を世界中の人々にもっと知らせていかなければならない。マングローブは向後さんにとって、今や奥深い魅力あふれたパートナーでもあるのだ。

地球上のマングローブを2倍にするのに、労働力を含めても約1兆円ですむそう。こうした方面にもっと日本のODAが使われたらと思う。今後、マングローブの研究機関として「砂漠に緑を」に対して、さらに多くの活動の場所が開かれていくことを望みたい。(大満)

アフリカ・ツリー・センター を支援する会

〒252 綾瀬市上土棚324 鳥居ヤス子
TEL 0457-76-0811

黒人抗争の激しい南アフリカ、ナタール州の一角に黒人たちの農場がある。ズールー族のロバート・マジブコさんがスイスのNGOの支援を受けて1981年に開いたものだ。マジブコさんは大学で農業を学んだあと、40年以上も前からアフリカ各地で有機農業を教えてきた。アフリカの大地は古く、表土も薄い。土地がやせているので取れる作物の量も知れている。人々は干ばつのたびに食糧難に見舞われた。

マジブコさんの農法は溝方式といわれるもので、1メートルの溝を掘りそこに土と草を交互に入れる。草がスポンジの役目を果たすので各層に酸素を供給し、バクテリアの働きを活性化させる。もちろん化



農業教室で学ぶ若者たち

学肥料や農薬は使わない。少しの雨でも保水効果があるので樹木を育てることができる。樹木を植えれば、落ち葉は肥料になり土壌の浸食や荒廃を防ぐことができる、というものだ。2~3年前大洪水に見舞われ、せっかく植えた苗木も何もかも流されてしまったが、今は立ち直り、60人の若者たちと農作業に励んでいる。

アフリカ・ツリー・センターを支援する会はマジブコさんのやり方に賛同する人々が6~7人集まっ

てできたグループだ。世界中にマジブコさんを支持する人たちがいるが、日本では初めてである。日本が南アフリカの貿易相手国として一位になり、世界的に非難されるようになってアパルトヘイトに関心を持つ人々が増えてきた。ただマジブコさんが“穏健派”といわれるズールー族に属しているせいばかりかあまり注目されていない。アフリカ・ツリー・センターの話をして下さったブルース・ウォーカーさんもマジブコさんの政治的立場や、ズールー族以外の黒人たちが彼のことをどう思っているのかはわからないという。

アナンダ・マルガ国際救援隊

(アムルト / アムルテル)

〒164 中野区弥生町 5-23-3
コージーハイツ 101
TEL 03-383-6322

アフリカで活動する NGO は欧米や日本の団体ばかりではない。ここに紹介するアムルト / アムルテルはカルカッタに本拠を置くアナンダマルガというヨガのグループから生まれた救援組織だ。現在は 160 개국で救援活動を行っている。1984～85 年の大干ばつの時はエチオピアでも緊急救援を行っていたが、復興に移行する際エチオピア政府と契約を結ばず、エチオピアから撤退した。86 年からは NGO に比較的協力的なブルキナ・ファソに力点を移し、やはり干ばつの痛手から立ち直ろうとする人々を支援している。

アムルト / アムルテル (アムルトは男性のグループ、アムルテルは女性のグループである) にはさまざまな国籍の人が参加しているが、特徴的なのはオレンジ色の制服である。どこの国でも男の人はオレンジ色のターバンを、女の人はカトリックのシスターのようなオレンジ色の布をかぶっている。アフリカなどで見かけた人もいかもしれない。

アムルトの活動は宗教の布教の一環のようにとられることがあるが、メンバーの人たちはヨガは宗教ではないときっぱりと否定する。ヨガは自然と人間と社会の調和を求めるもので、イデオロギーを押しつけることはしないと。災害や環境破壊はその調和を乱すものである。彼らはヨガと人類や動植物への福祉によってその均衡を取り戻すことができると考えている。

しかし彼の農法はズールー族だけのものでなく、土壌の浸食に悩む他の地域の人々にも伝えられるべきものだ。イギリスの自然農法家は「マジブコ氏の農法は南アが産出する金やダイヤモンドより価値がある」と言っている。

ブルースさんは来年か再来年はマジブコさんの農場を訪れたいという。南アフリカはさまざまな問題を抱えているが、少なくともこの農場は南アフリカと他の地域とをつなぐ窓となっている。ブルースさんは農場を支援することで南アフリカに関わっていききたいという。



ブルキナ・ファソの農業復興プロジェクト

アムルトは世界各国に支部があり、その地域の活動はそれぞれの支部に任せられている。大島三原山噴火救援のためコンサートを開いたが、これは日本のアムルトによって行われた。しかしブルキナ・ファソやガーナの農村復興のような大がかりなプロジェクトの場合は現地のアムルトだけではとてもやっていけない。日本やアメリカ、ヨーロッパのアムルトが資金を送り活動を支えている。

ブルキナ・ファソのアムルトの活動地は、ナイジェリアに近いゴロム・ゴロムからさらに北西に 46 キロほど行ったデオウという町とその周辺の村落だ。対象者は 1 万 2000 人。ほとんどの人はミレットなどを作っている農民であるが、2000 人は 1984 年の干ばつの時マリからやって来て住みついた遊牧民である。彼らの家畜の 3 分の 2 は干ばつで死んだ。アムルトは 86 年に村人たちと植林、穀物銀行、農業指導、井戸掘り、医療活動を始めた。現在も WFP からの食糧を配りながら農業教室、診療所建設などを行っている。

ところで日常の活動資金であるが、ほとんどチャリティコンサートなどで集められる。プロの音楽家に混じり芸達者なアムルトのメンバーも参加する。なお、毎週土曜日はアムルトではホームコンサートが開かれる。お食事付きで 1200 円。ただし食事はベジタリアンで、電話予約が必要とのこと。

エチオピア 干ばつと飢餓の歴史

JVC エチオピア コーディネーター 山田 盛

古文書に見る干ばつの歴史

エチオピアの干ばつと飢餓の歴史は、この国の歴史とほぼ同じ長さをもっている。古いものについては、記録がほとんど残されていないため、正確な状況を知ることにはできないが、中世以降の文書のなかに、度重なる干ばつの襲来とそれに続く天然痘、コレラ、インフルエンザ等の疫病の蔓延が、建国以来この国を繰り返して苦しめてきたことを物語る記述をみることができる。

教会に残る文書は、当然のことながら宗教的色彩の濃いものであり、科学性、実証性の欠如を避けられないものであるが、状況を想像する手がかりを与えてくれる。それによれば、9世紀と12世紀に大きな干ばつがエチオピアを襲い、飢えと疫病による死の恐怖が全土を覆った。そしてそれは人間の邪悪な心に下された天誅とみなされていた。

14世紀以降になると飢餓の記述の頻度は増し、その原因についても、干ばつ、家畜を死に至らしめる疫病、作物を喰いつぶす害虫等、より具体的な因果関係の追求がなされるようになる。しかし惨事の規模を知る手掛かりになる統計数字は残されていない。

1888～92年の大飢饉は、Dr. Richard Pankhurstの研究により、相当程度その状況を知ることができる。それによれば惨事はイタリアから輸入された牛のもたらした疫病にその端を発する。疫病は短日日のうちに、マッサワ港から全土へ野火の如く広がり、90%の牛の死をもたらした。耕作を牛に頼るこの国の農民にとって牛の死は、農作業をほとんど不可能にしてしまう意味をもつ。1888～90年の干ばつとバッタ等の害虫の大発生が悲劇に拍車をかける。1889～90年の1年間だけで家畜の値段は30倍以上、主要作物の価格にいたっては100倍以上にもはねあがり、人々はこれまで口にできなかったものを食し、人身売買、強盗、自殺から、果ては食人までが行なわれるようになる。野ざらしにされた死体に群がるハイエナと禿鷹が、人間から最後の尊厳を剥ぎ取り、エチオピア全土が広大な墓地と化した。州によっては人口の3分の2から5分の4の人々が犠牲になったと言われる。また食を求めた大規模な人間の移動は、人口の分布、異民族間の交流、文化の

発展上、大きな影響をもたらしたものと思われる。さらにこの大災害により、イタリアの侵略に対し、メネリクⅡ世は1896年のアドアの戦いで駆逐するまで、忍従の期間を余儀なくされる。

深刻化する飢餓

20世紀のエチオピアは、封建主義の疲弊、ヨーロッパ諸国による資本主義、帝国主義の洗礼、オガデン紛争とチグレ、エリトリア独立闘争の開始、そして軍事クーデターによる社会主義政権の樹立という、激動の時代を迎える。そしてその間も、飢えの危機は容赦なく、繰り返しこの国を襲い続ける。帝政崩壊につながった1972～74年の大飢饉を含め、約10年毎に飢餓の危機に見舞われている。ウォロ州だけで20万人もの犠牲者を出した前述の72～74年の大飢饉はまた、救援復興委員会（RRC）という政府機関の設立につながった。この委員会は、被災住民に対する統括的救援活動と諸外国の政府、民間援助機関の活動の調整を、その任務とする。委員会の設立は、迅速かつ組織的な救援活動に向けての第一歩であり、救援から復興につながる長期的視点の導入として高く評価できると思う。しかし、その財政基盤の脆弱さは、長期計画の実行をいまだに不確かなものになっている。

救援復興委員会（RRC）、ユニセフ、食糧農業機構（FAO）からの警報と救援要請にもかかわらず、100万人もの犠牲者を出した1984～85年の大干ばつは、一刻の猶予が容易に大惨事を招くことのみならず、飢餓の要因は、取り除かれるどころか一層深刻かつ根深いものになってきていることを再認識させるものであった。また一方、土地の荒廃した北部地方から比較的肥沃な南西部地方へ住民を移動させようという目的のもとに始まった集団移住計画は、住民の意志を無視した非人道的なやりかたが改められ、特に、保健、衛生面での十分な配慮が保障されてはじめて、実効性の高いものになるであろう。

惨事の痛手から立直るきっかけをつかみかけた矢先、再び飢えの危機がしのびよる。1987年の大雨期（7月上旬～9月上旬）は、その開始が1カ月遅れた上、例年の半分以下の雨量を残し、あっけなく

終わってしまった。同年11月、救援復興委員会より、520万の予想被災民に対し、約100万トンの食糧が緊急に必要なとの発表がなされた。翌年の小雨期（2月上旬～4月上旬）にも、十分な雨が降らず、干ばつの長期化が決定的となった。そしてそれと呼応するかのように、チグレ、エリトリアの解放戦線のゲリラ活動が活発になり、救援物資の輸送にも支障をきたすようになった。エチオピア政府はもちろん、国連機関、各国政府そして民間援助団体の迅速かつ組織的な対応により、悲劇の再現を阻止できたことは称賛に価する。北部地方の治安状況も、ソ連、キューバの支援を受けたエチオピア政府軍の力による鎮圧とはいえ、一応の平静をみている。

緊急救援とは

1988年の大雨期は記録的な雨を残し、豆、トウモロコシに少なからぬ被害を与えたものの、エチオピア全土で706万トンの収穫量をもたらした。1989年小雨期の見込み収量40万トンを加えた数字は1987/88の14%、1980/81～1983/84の4年間の平均の11%増を示している。それでも、1989年の必要量に40万トン以上足りない。

緊急救援の目的は人命救済にあり、それ自体、問題の核心に迫り、復興開発につながるものではない。避けられない人道的行為ではあるが、往々にしてそれは、住民の自立心の伸長を阻害し、依存心の高揚を助長するだけの結果に終わりがねない。地域の特殊性を考慮した緻密な長期プログラムの作成と住民参加を基本とした粘り強い実行努力が成否の鍵を握り、また厳しい政治、社会環境変革のいしずえとなりうる。



飢餓はくり返しこの国を襲ってきた。

JVCの救援活動を振り返る（1987～88年）

1987年7月の調査に始まった緊急救援活動は、翌88年11月の最終食糧配給をもって一応の収束をみた。1年半近くにわたる活動を振り返り、その功と罪を列挙すれば概ね下記のようなになる。

〔功〕

1. JVC独自の調査活動に基づき、ウォロ州の救援復興委員会に警告を発し、対応を促した。
2. これまで救援の手が届かなかった最僻地住民を対象とし、食を求めての移動、餓死の発生を防ぐことができた。
3. 労働の対価として食糧を配給するフード・フォー・ワーク形式を守り、依存心の高揚を防ぐとともに地域の復興開発への端緒を開くことができた。

〔罪〕

1. 政府機関による被災地域の認定と配給量の決定に基づき、JVCは救援活動を継続していくのであるが、中央機関と地方のその間の見解の不一致、度重なる政策変更そして刻々と変化する状況に対する柔軟性を欠く対応は、JVCの機動力への制約となり、JVCと地域社会との間に不必要なあつれきを生み出す原因ともなった。
2. 被災認定地域が広がり、対象住民の数が増加するにつれて、フード・フォー・ワークの作業の企画、監督に十分な時間と人材を投入することが困難となり、作業効率の低下を避け得なかった。
3. 状況を把握するための客観的な情報の収集が困難なため、住民の陳情と政府機関の画一主義に翻弄され、JVC独自の確たる立場を保つことができなかった。

雑感

助ける側と助けられる側の間には大きな隔たりがあり、持たざる者は着実にその数を増やし続けているとともに、彼らに打ち込まれた困窮のくさびはいっそう深く、彼らの肉体と精神を蝕んでいきつつあるように思える。一方、持てる者はその欲望の充足を知らず、刹那の饗宴に、茫漠たる虚無を忘れる。悲劇の根絶にどれだけすぐれた叡知が傾けられ、どれほど多くの犠牲が払われたことか。正義の歩みが僅かでも先んじていることを願って……。

今年も…

東京グリーンウォーク

- 東京のグリーンベルトを歩く
- 歩いて募金を集める
- 集まった募金はNGOへ

5月の日曜日のお昼ごろ、1000人近くの人間が三々五々歩いてきます。思い思いに話ながら歩いている人の約半分が外国人。もちろん、日本人と外国人の交じったグループもいれば、赤ちゃんを抱いた夫婦もいます。10キロたらずの行程の途中に何か所かあるスタンプ所には、パネルをつかった展示があったりもします……。

そう、T & Eの読者なら、誰でも名前ぐらいは知っている「東京グリーンウォーク」の風景です。年年盛んになり、今年で4回目を迎えたこのイベント。ちょっと日本的でない雰囲気があります。なぜでしょう、そして誰が始めたのでしょうか？ そんなことをハンガー・アクション・ネットワークのジュディ・エプSTEINさんと、JVCの南部良一くんに聞いてみました。

東京グリーンウォークはジュリアンさんという男性と彼の仲間が、4年前に始めました。

「当時、ジュリアンさんはアメリカン・スクール・オブ・ビジネスという、今はなくなった学校の先生をしていました。危機を深めたアフリカの飢餓になにかできないかと、同僚のクラーク・チンさんたちと相談して始めたのが、第1回の“ウォーク”です」と南部さん。第1回は山手線一周、26キロを歩きました。参加者はジュリアンさんの職場を中心にした人と、クラークさんから呼び掛けを受けたJVCの関係者などで、約200人（内、外国人が約130人）。総寄付額は200万円。全額をJVCのアフリカでのプロジェクトにご寄付いただきました。

この第1回で私たちは“スポンサード方式”という日本ではあまり馴染みのなかったやり方を知りました。まさかT & Eの読者でこの方式をご存じない方もいないと思いますが、もう一度確認しておきましょう。

＜スポンサード方式＞まず、歩く前にスポンサーを見つけます。スポンサーとは“1キロ歩くと何円を寄付”というふうに契約しておきます。そし

て、当日歩いた距離に応じて、お金をもらうわけです。もちろんスポンサーは多ければ多いほどいいわけです。今回のように10キロ内外だとたいいていの人が完歩するわけですが、去年の長谷川くんの日本縦断ウォークなどでは、まさに、頑張って歩けば、それだけお金も集まるということになります。

*

翌1987年の第2回では、参加者が400人、総寄付額が400万円と倍増。さらに翌1988年には900人、600万円に急成長しました。この第3回めのウォークで、連絡先に自宅を提供して大活躍したのがジュディさんです。

「駅前の募金や政府のAIDは信用できないし、お金をあげるだけではなく、なにか行動したいと思って……」

「去年は事務局を自宅に置いたのですが、大変でした。毎日、電話電話で。英語の新聞に載った日なんか、凄い量で。日本語のマスコミも載りましたから英語の電話、日本語の電話……、本当にたくさんでした」

昼間の勤めから帰って、ジュディさんは留守番電話に吹き込まれたメッセージに答えていきました。話し中ばかりでなかなか連絡がつかなかった、とJVCの関係者が言うくらい、電話は殺到したようです。今回は“NGO活動推進センター”というよき受皿もあり、彼女は事務局を辞退したそうです。

さて、ジュディさんは現在ある高校で英語を教えています。

「先生はウォークに興味ない。でも生徒は関心あるね。去年とてもやりたがりました。でも、朝天気予報で雨の確率何パーセント以上だったら中止、という分かりにくい規制でしたから（雨が振りそうな日に行なわれた去年のウォークに）30人もこられませんでした」

と残念そう。その経験を生かして、今年は雨天決行と案内書に明記してあります。

*

「外国人と日本人の人数は半々だけれど、お金は7対3くらいかな。2万円以上寄付してくれた上位49人のほとんどが外国人、1位はなんと20万円以上ですよ」

これは、南部さんの話。実はこのことには私（AG）も興味がありました。というのは、私も何人かの参加者を知っています。その人たちは当然JVCの関係

者ですが、スポンサーになってくれているのも、何度か顔を合わせた人がほとんどです。つまりJVCの仲間内で、お金を集めているのです。

ところが、外国人の人はそうではないようです。グリーンウォークの発端からして、職場の同僚への呼び掛けから始まっているのです。JVCにも私をはじめとして、社会人も多いのですが、会社の知人友人にスポンサーになってもらったというのは、ごくまれのようです。この違いはどこからくるのでしょうか？

また外国人の人数の多さにも注目していました。首都圏の人数比から言って、いまだに外国人が多いということが不思議です。たしかにPPP（People to People Partnership）とATC（the Africa Tree Centre）と外国人の多いグループの参加もあります。しかし、それらはほんの小さなグループで、500人近い人を集める力は直接的にはないはずです。

実はこのふたつのことに関して、ジュディさんにぜひお聞きするつもりでした。いえ、たしかに尋ねました。しかし、はっきりした返事がありませんでした。もちろん私のインタビューが拙劣だったということもあるでしょう。ミーティングの前で十分時間がなかったこともあります。しかし（言い訳めきますが）それ以上に、スポンサード方式に代表される寄付をつる行為が、ごく自然に行なわれているので、あらためてなぜ？と問われても答えにくい、ということもあったようです。それは英字新聞の記事に対する反応の良さにも感じられます。

*

今年の5月に行われる第4回ウォーク実行のためにすでに、10回近い会合がもたれています。おもな参加者は、ジュディさんのような第1回の主催者の流れをくむハンガー・アクション・ネットワークのひと、JVCなど人数を集めると同時に、お金を受け取るNGOの代表たちです。やはり外国人が半数くらいを占めています。

前回の反省から始まった打ち合わせも、どんどん具体化し、もうコース、日程などは決まりました。先日傍聴させてもらった会議の議題は、寄付金の分配先の問題でした。

今回は、JVCのほか、さきほどのPPP、ATC、さらにサヘルの会、シャプラニールの計5団体に浄財が分配されました。JVCは募金500万円余のうち200万円余を受け取り、断然トップでした。今年は新たに、日本ネグロスキャンペーンが加わり全6団体でわけますが、その比率が問題になったようです。

会議では、多くの場合、日本人の出席者は英語で外国人は日本語で話していました（これなら、多少拙くても、言っていることは分かるわけだ！）。その間に英語、日本語の“同時通訳”が入ります。という状態で、語学力の不足する私にははっきり分からなかったのですが、寄付金の配分は、まず寄付者の希望、その意思表示がない場合、各団体が集めた参加者の比率で分配することになったようです。どこが集めたかを知るために、参加の理由を尋ねるアンケートが検討されていました。

といった具合に重要なことは決まり、あとは、マスコミに掲載を呼び掛けたり、スタンプポイントを作ったり、そして参加者を集めたりの実行段階に入りました。

なにはともあれ、第4回の今年の目標は総参加者1500人に総寄付額1000万円です。

「参加者に関しては外国人のほうは順調だろう」というのが南部さんの意見です。

「このように行事として定着してしまえば、日本に住む外国人祭りという感じで、友だち作りのためにも集まる。これほどの規模の催しはそう多くない」

というのです。となると、成功の当否は日本人の参加者にかかってきます。この催しをもっと、もっと大きく、かつ根付いたものにするため、ぜひあなたもいらっしゃってください。

第4回 東京グリーンウォーク

5月14日(日)雨天決行

集 合：井の頭線久我山駅 AM10:00～12:00

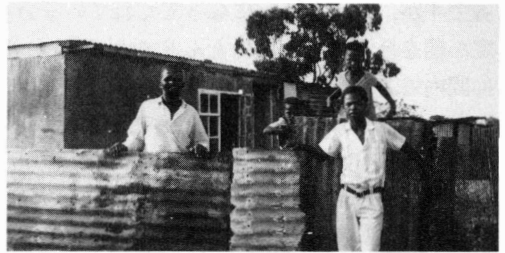
コース：玉川上水沿いに小金井公園まで 11キロ

連絡先：JVC 03(834)2388 林、東村



南アフリカの黒人抗争

佐倉 洋さんに聞く



最近南アフリカを訪れ、アパルトヘイトの現状を見てこられた佐倉洋さんに現地の様子を語ってもらった。

*

*

短い期間ではありましたが、お話ししなければいけないと思ったことのひとつは、国内難民の深刻化です。ケープタウン近郊のクロスロードやダーバン周辺に行きますと、掘立て小屋ともいえないような家に住んでいる人が大勢います。クロスロードでは、テント暮らしをしている人も多いのです。その光景は、まさにソマリア難民キャンプで見たものと同じでした。

— 南アフリカは豊かな国だというのに、その原因はどこにあるのですか

他のアフリカ諸国に比べるとたしかに豊かですね。街の様相も、高速道路の発達にしても、夜間こうこうと電灯の照明が輝いていることも、他のアフリカでは見られないことです。もっとも国自体としては1人当たりGNPが1790ドルですから東欧並みといわれていますが……。原因としては、やはりアパルトヘイトをあげざるをえません。とくにグループエリア・アクト（人種別居住地区分離法）の影響があります。ことにダーバン周辺の場合、クワズールーホームランドのインカタグループの一般住民への暴力行為がひどくなっているのです。彼らから逃げてくる人がいるのです。

— その黒人対黒人の抗争の背景は何なのですか

ダーバンで発行されているスピーク誌によると、ピーターマリツバグ市ではこのインカタとの紛争で、昨年1000人以上の人が命を失ったということです。インカタはクワズールーランドの政権党で、G・ブテレジが党首です。インカタとは「民族文化解放」というズールー語で、もともとはアパルトヘイトには反対だったのですが、最近では自分たちへの加入を拒否する一般住民に暴力をはたらいてきているわけです。スピーク誌は、放火や殺人、強姦が日常化していると伝えています。

（注） 反アパルトヘイトの団体

ある女性も、自身の恐怖の体験を語っています。「夜中、戸をドンドンたたくものがいるのでベッドから飛び起きました。男たちが外にいて、10ラント払ってインカタに加入しろというのです。私は、お金を持っていませんでしたので、殺されると思い戸を開けませんでした。その男たちは口汚なくののして立ち去りました。明け方の4時頃3人の子供たちを連れ、親戚の家に逃げました。2時間ぐらいたとで戻ってみると、私の家が燃えていました」

別の女性も、こう語っています。

「こんな恐いことは2年前ごろから始まりました。インカタに加入しないものは、みんなUDFだというのです。男たちが来て、近所の婦人を強姦しました。そのあと家に火をつけてしまいました。その家には102歳になる老婆がいたのですが……」

インカタとしては、ズールー族でただ1つの組織でありたいというのです。けれどもクワズールー政府に住居や教育、商売の営業権で頼る必要のない地域の住民は、インカタにあえて入る必要がないのです。そこで暴力的脅迫で加入を強制しているというわけです。

— 政府の姿勢はどうなのですか

政府もインカタには協力的といいます。UDFやCOSATU^(注)の活動は制限されているのですが、インカタには特に制限がないばかりか、TVやラジオを使っているのアピールも自由に行っているということです。

つまりこのような黒人対黒人の抗争に南アの混乱の原因があるというのは、的を得ていないと思います。スピーク誌もいっているように、このような紛争は、人々が一致して新しい南アを作ろうとするのを妨げ、アパルトヘイトを温存する人々を助けているということが出来ます。

— 新しい南アとはどのようなものなのでしょうか

ある黒人がケープタウンの国会議事堂を見て、これは自分たちの政府じゃないと悲しい目つきで言っていました。彼らが、この国の政治に、1票という形で参加できないというのは、どう考えても異常なことではありませんか。

研修生6人、がんばっています

JVCでは3年ほど前から研修生制度を取り入れ、現場に行く前のスタッフやボランティアに東京本部で1カ月ほど働いてもらうことにしている。というのは、それまでJVCとのかかわりがなかった人にとって東京本部の役割が見えにくいからである。この制度を取り入れてからは現場と東京のコミュニケーションもますますのようだ。

3月1日の段階では6人の研修生がオフィスに顔を出している。各現場の人員の入れ替え時期が重なったためだが、こんなに一度に研修するのは初めてだ。今では現地視察のため留守にしている各プロジェクト担当になり替わり、東京事務所を取りしきっている。

それではその6人をご紹介します —。



江原 浩昭 (えはら ひろあき)

3月25日に日本を出发。エチオピアのマーシャ村で伊藤達男さんの後任として植林、農業プログラムを受け持つ。青年海外協力隊のOBで、83年10月から2年間ザンビアで野菜栽培を指導していた。

現在は林、鈴木両スタッフから任せられたエチオピアの会計資料を黙々と作成中。2月10日岩崎駿介代表を媒酌人に広美さんと結婚。なぜか愛称はタコ。



江原 広美 (えはら ひろみ)

まだまだ江原という名前が身につかず時々名前を呼ばれて驚く。やはり伊藤幸子さんの後任としてマーシャ村の婦人プログラムなどを受け持つ。

協力隊時代はマラウイで数学の先生をしていた。この時も前のエチオピアの代表だった加納妙さんの後任。

「大学の環境教育は人間の視点が欠けている」と批判する。愛称はドラ。一声発声しただけで納得。ただ今JVCの一番の元気印。



杉江 美子 (すぎえ よしこ)

釘村千夜子さんの後任としてカンパチアの母子保健活動に携わる。4月末に出発の予定。

84年12月から協力隊員としてマレーシア、サバ州の救急サービスセンターで働いた。巡回診療や衛生教育の経験はカンパチアでも役立てそう。

病院勤めのかたわらフランス語とクメール語のレッスンを受け、準備に余念がない。カンパチアでの楽しみはテニスとのこと。



船川 秀夫 (ふなかわ ひでお)

チームリーダーで農業技術者だった萩ノ迫善六さんの後を受け、すでにソマリア入りした羽田尚之さんとともに農業指導を行う。

農大在学中に2年間ソマリアで働き、卒業後再びソマリアへ。今回は3月18日に結婚した三貴子さんと2人で行くといい、独身者たちをくやしがらせる。前回の経験を生かし、現場だけに埋没しないよう、他のNGOの活動や地元民の生活も見たいと抱負を語る。



南部 良一 (なんぶ りょういち)

チャリティー・ダイエットで20kg以上減量させ、一躍注目を浴びるようになった時の人。減量してからはフットワークも軽く、グリーン・ウォークのコーディネーションを担当し、国内活動の要となっている。

実はボランティアとして派遣されるのは今回が2回目。最初に行った時に「帰れ」と言われたのがくやしくて再挑戦となった。今回はエチオピアとソマリアの双方で1年間現場に入る。



北詰 秋乃 (きたづめ あきの)

3月末から2カ月ほど日本語教師としてバナニコム・キャンプで働く。日本語を教えた経験はないというが、タイ語が上手で事務局長を喜ばせる。

大学での専攻は社会福祉だが、NGOや開発にも興味がある。NGOについては自己満足なところもあるんじゃないかと、なかなか厳しい。タイが大好きなのでチェンマイ大学を受験したが今回はボツ。「6月以降は、晴れてプータロウ」とは本人の弁。

JVCプロジェクト

1989年2月25日 現在

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 毎月第2, 3土曜日 午後2時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介 (代表) 星野昌子 (事務局長) 熊岡路矢, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 加藤志保, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC神奈川)	神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県および県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション。		山口誠史,
日本国内	●定住難民プロジェクト 1月28日(土)に神奈川事務所にてミーティングを行った。定住難民プロジェクトのボランティアを中心に約20人の参加者があり, 日常のボランティアとJVCとのコミュニケーションが少なすぎる点など, コーディネーターに対する批判も出された。次期コーディネーターの小野も出席し, 今後はもっとこまめにボランティアに対応するなどの抱負を述べた。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 禅林寺龍華会基金, 「国際交流ホスピタリティトラスト」, 日本少林寺拳法連盟 特別養護老人ホーム「さくら苑」	山口誠史, 他約60人
	●東金農場 自給用の野菜を作っている。 東金で産直運動をしている「さかさま農園」や山武ボランティア協会などと, 毎月1回勉強会を行っている。		松岡美奈子 東金市民有志
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助 (コレブを中心に) 緊急事態の一応の終息により'88年12月をもって食料配給は終了した。 ●総合的復興促進 (マーシャ) - 植林, 土壌保全 昨年10月より今年の植林に備えて50万本の苗木を準備中である。また農業省の協力で植林予定地も近々決まる予定。 豪雨のため, 新たに掘られたみぞへのチェックダムの建設, また破損した既存のチェックダムの修繕も行われている。 - 母子保健・栄養 種々の訪問形式による指導に加えて母親学校が1月よりアダグイヤで始まった。 - 建物建設 最貧層の農民を対象とした職業訓練の一環として養鶏を, 農業省の協力を得ながら計画しており, そのための鶏小屋を建設中である。 - マーシャクリニックへの支援 予防注射のための登録, 輸送等に関する支援を今までどおり続けている。	CRDA, WFP, 犬養道子・みどり一本運動, 日本少林寺拳法連盟, モラロジーMIRC, 東京グリーン・ウォーク, 西本願寺, ジャパン・タイムス, チャリティ・サイクル, Tree for lifeの会, 中部善意銀行	鈴木直喜, 山田 盛, 伊藤達男, 伊藤幸子, イエットベルク, ソロモン, パレタ, ダニエル, エシャトー, トーマス, シュクール

活動地名	活動内容	支援団体	担当者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	ソマリア北東部で政府軍と反政府軍の紛争が続いており、予定どおりの食糧が届いていないらしく、栄養失調の出現率が高い。このため UNHCR は配給物資の入荷港をソマリアのベルベラからジブチへ変更するようにソマリア政府に申し入れた。 自主帰還プログラムが1月28日に行われ、今回は約300人強の難民がエチオピアに帰っていった。 ●農業による自立促進 ユニット1の植林も終了し、個人への土地配分が行われ、新生農場としてスタートした。 ユニット14にポンプを設置。しかしジュバ川の水位が低下しているため、10mものパイプを必要とした。 ●植林 マガネイ・キャンプで今までJVC が配布した樹木の残存数を調べた。	UNHCR, 仏国土をつくろう会	金子一弘, モハメット・アブディ, ムハボ, 中野周二, 磯田厚子, 羽田尚由, モハメッド, シアッド, アオキ, アブドラーヒ, アブディナサル, ヒレ, アブディカリム, シュクリ
ジャララクシ・キャンプ (ヒラン郡)	●農業による自立促進 シェベリ川の水位低下及び土壌保全のため、メイズ等の作付は見合わせているが、共有地に植えたパパイヤや玉ねぎ等は収穫の時期にある。また、さらに35haの拡張を農民は希望している。 <新農場> ジャララクシから約20kmの地区に100haの農地を難民グループが開墾始めた。JVCとしては彼らをサポートする方向にある。	R.I. - Japan 創価学会青年平話会議	ラシッド
カンブチア カンボット県 プノンペン カンダール県	●サンタビエツ技術学校／ワークショップ 現在までに、3台のトラックのエンジン・オーバーホールを終えた。中程度や簡単なオーバーホールを合わせると、合計60台以上のトラックを修理したことになる。技術学校では9月から第2期の研修が始まり、孤児院からも2名の者が参加した。 自動車労連より寄贈されたフォークリフトが到着した。次回の6カ月コースのカリキュラムが完成した。 ●井戸掘り 農業省水利局の井戸掘りチームは、9月12日から井戸を掘り始めた。ワークショップ用の2本の井戸、トゥルタボン寺小学校の井戸はすでに完成した。プノンペン郡で2本の井戸を完成したあと、カンボット県で20本の井戸掘り活動を行う。 ●RINE (ライン) プログラム [母子保健活動] 日本の病院より寄贈された光学顕微鏡が、保健省母子保健局に届けられた。 各郡から32名が参加した年4回の保健スタッフ訓練が完了した。 JVC 技術学校の交換部品購入資金などの支援を求めるキャンペーンを実施中です。資金不足のため建設が中断していたカンダール・ストウン郡小学校完成のための80万円カンパは四日市商業高校、モラロジ・MIRC の御協力で全額集まりました。建設を再開しました。ありがとうございました。	創価学会青年平和会議, モラロジ・MIRC, 立正佼成会, 日産労連, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡寺族青年会, 覚法寺, 「チャリティ・ウオークかながわ」, 日本少林寺拳法連盟, 毎日新聞大阪社会事業団, 大竹財団, 東京都社会福祉協議会, 国際ソロプチミスト千代田, 明るい社会づくり運動神奈川県協議会, 浄土宗東京教区青年会, 和平基金, 国際保健協力市民の会 (SHARE) 仏教救援センター, 四日市商業高校, 日蓮宗宗務院, 横浜市「世界ふれあいキャンペーン」, 「お告げのフランシスコ姉妹会」, 日本海	簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, 釘村千夜子, 古西 勇, [カウンター・パート] (運輸省) タック・カン, アム・ディエン, メアス・サメット, ゲット・ソーン, カム・ボラ (保健省) アン・サルン医師 (カンダール県保健局) ニム・ニエム医師 (農業省水利局) セン・ロー

事センター, 中部善意銀行, 堺市ロータリークラブ

活 動 地 名	活 動 内 容	支 援 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	①総務、会計、資金調達 ②各機関（国連、タイ政府、日本大使館、各国民間援助団体）及び東京事務所、各プロジェクトとの連絡調整 ③情報収集、広報活動 ④日本人主婦ボランティアとの連絡調整 ⑤季刊「ニューズレター」（英語、タイ語）の発行 ・1月29日、日本人会運動会で古本などのバザー。 ・2月18～28日、JVC、モラロジー合同のスタディーツアーがJVCのプロジェクト及びタイ各地を訪問。 ・2月25日、JVCのバザー、古本、食品、ハンディクラフト等を販売。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャンブーン、カモン・ミンムアン、熊沢ゆり、チャタヴァデ・モンコン
カオイダン （カンブチア 難民キャンプ）	●西崎憲司記念技術学校 一気筒エンジン、単車、自動車、電気の理論と演習の各コース、溶接コース、大作業所のプログラムを実施。 現在 407 人の生徒が技術習得に励んでいる。今年度から新たに竹細工、漁網、水くみポンプの各コースを開設する。タイ政府の方針では、2月末をもって第三国定住のインタビューを打ちきり、（米国のみ45日間延長）3月いっぱいを準備期間とした上で、4月1日から本国帰還のための職業訓練センターとして再スタートすることになっている。これをもって難民の第三国定住は基本的になくなる。	UNHCR, SV (Stichting Vluchteling)	ソムヨット・ラタナタム、清水俊弘、大石道子
パナニコム （第三国定住待ち キャンプ）	●日本語学校 ・日本定住予定者へのプログラム ①日本語教育 ②日本文化、習慣の紹介 ③渡航準備オリエンテーション ・他国定住予定者へのプログラム - 渡航準備オリエンテーション 2月3日、カオイダン・キャンプから89名のカンブチア難民が到着。7日よりひらがなの学習を開始。	天理教千葉 R.I. - Japan	鈴木由子、竹村雅義、アナン・ブダミリンパティープ、熊沢ゆり、柿木光寿
地域開発 （バンコク市内の スラム地区） （ブリラム県の M村）	●奨学金プロジェクト スラムの子供 200 人を対象に奨学金を支給している。 ●クロントイ図書館 スタッフの部屋の拡張工事をした。 ●スラム生活改善プロジェクト ラチャタパン・スラムで住民の組織化を行っている。 ●農村開発 ブリラム県M村の小学校で農業教室を開いている。	モラロジー-MIRC, We Love Asia, Tree for life の会、雄勝町町内寺院会、国際ソロプチミスト駿河、長谷川勉チャリティーワーク、JOFIC	ワティット・チャンスリャオン、サムルアイ・ジョンヨークラン、リーラ・クンナロン、コメン・スンスマン、今泉 恵、ガームシン・ロンクン
ラオス （ヴィエンチャン）	●生活改善指導員養成プロジェクト 母子保健、幼児教育、家政一般、農業等の基礎知識・技術の普及を通して農村地域の復興と自立を促す。ヴィエンチャンに上記の知識・技術を教えるセンターを作り、地方の婦人を対象に生活改善指導員を養成する。 現在はヴィエンチャンで保健省、教育省、農業省の協力の下にラオス婦人連合と共同で養成コースのカリキュラムを作成している。養成コースは89年3月から始まり、89年末以降指導員の農村での普及活動を多面的に支援する。	庭野平和財団 難民と地球の緑を考える会 「チャリティ・ワークかながわ」 スコティッシュ・ナイト・イン・専修寺 聖ヨゼフ老人ホーム	谷山博史、前田初江

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (2月小計 22,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (2月小計 286,215円) アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
- C. インドシナ難民救援募金 (2月小計 3,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- D. カンプチア募金 (2月小計 688,680円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- E. タイ・スラム募金 (2月小計 17,000円) バンコク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及び図書活動に使われます。
- F. スラムの子供奨学金・基金 (2月小計 579,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- G. タイ農村募金 (2月小計 3,000円) タイの農村開発のために使われます。
- H. 定住難民募金 (2月小計 5,000円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- I. JVC運営経費募金 (2月小計 70,000円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. ラオス募金 (2月小計 102,200円) ラオスの婦人の生活向上プログラムのために使われます。
- K. 無指定募金 (2月小計 406,500円)

編集後記

▶難民には食糧の配給はあるがマキの援助はない。煮炊きするためには周辺の木を切るしかない。どんどん木は切られ環境が破壊されていく。難民と地元民との争いも起きます。犬養道子さんはそんな難民キャンプの様相を見て木を植えることを提唱された。“みどり1本運動”の始まりだった。

1昨年11月、犬養さんはこの運動をJVCにも広げて下さった。先月までの募金総額は1300万円にのぼる。ほとんどの方が継続してお金を送って下さる。植林は1年、2年では終らず長い期間を要するのでこれはほんとに助かる。エチオピア担当、ソマリア担当とも現地視察中なので両名になにかわりましてお礼を申し上げます。



▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)

加入者名—JVC 東京事務所

犬養道子・「みどり一本」募金

東京0-212497 (2月小計 494,321円)

犬養道子さんの御厚意により、JVCに上記の口座を設けることになりました。この募金はエチオピアの植林プロジェクトに使われます。

1989年3月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所

〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階

☎ 03(834)2388 FAX: 03(835)0519

Telex: 7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9F (財)神奈川国際交流協

会内 ☎ 045(671)7082

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

Trial & Error (試行錯誤トライアル・アンド・エラー) 第88号

発行日 1989年3月20日発行 (毎月20日発行) 通巻88号

1982年8月16日第三種郵便物認可

